

地中海紀行 (渡歐日記第八信)

寺田貞次

二日、晴

運河航行中は意外に北風が強いので内海の波濤を憂て居たが幸浪静かである、マルセイユ着も既に迫つて来たので上陸の注意書が揭示され、マルセイユ上陸者に對しては洗濯物も本日み切と云ふ事である、今迄前途遠慮を夢見て居た航海、急に上陸気分になる、晝には北緯三十三度十四分、東經二十八度二十五分、O. H. 島附近を走て居る、午後一時から食堂で船長から歐洲旅行の注意が話される、初めての旅行者には参考になるから要點を記す事にする。

歐洲を旅行するには一度英國の倫敦か或は佛國の巴里がに落付、最手軽な旅裝にして出かけるがよい、倫敦ならば細非事務所と云ふのがある、巴里ならば諏訪氏が旅館業を營んで居り、旅券等の世話をしてくれる、諏訪氏は俗にパスポートの伯父さんと稱せられる程である、マルセイユでは田川、ベルリンでは棚橋と云ふのが居る、此等に依頼するが便利である。

出立前豫め旅行の計畫を立て、約何日間と定め、實行には各市に在るトーマス、クツクに相談すると、豫定に應じて汽車、汽船の時間表を作ってくれる、之に要する貨銀は此處で定まるから夫だけ支拂へば全部の切符を發賣してくれる、都合によつては宿泊地のホテル迄も定める事が出来る、宿泊料をも支拂て置

けば着の時にはクツク店から其ホテルに通知して室を準備して置くから、旅行者の多い時季等でも宿泊を断はられると云ふ不便がなくてよい、但しクツクの缺點と申すべきは、旅行を豫定通り實行しなければならぬ點である、豫定を急に變更するに役立たなくなる、故に餘り長途の旅行には一時に依頼せず、少しづつ切つて依頼する方が便利になる、旅行上不便を感ずるのは通貨の各國異なる事である、旅行者は出立の際に最初行く國、乃至は其次に行く國位の通貨を約拾圓づつ位、細い金に兩替して持參し、國境を出る時には其處でチェインツして行くがよい、旅行中は現金は盜難の憂がある、獨逸では所持金額の制限があつたが、レンテンマーク實施後は此の心配はなくなつたけれども尙一度念をおして置く必要があります、故に正金銀行か臺灣銀行か或はトーマスクツクの信用狀にして持參するが最安心です、クツクの店は世界中至る處に支店があるから必要に應じて何處でも受取る事が出来るからであります、信用狀は狀と證明書とが別通になつて居ますから保存には各別途にして置くが宜しい、之は一朝紛失した時の用意の爲めです。

旅行に出立する際は時間に餘程注意する事が必要です、一分の差でも非常の間違を引き起す事がある、先づ停車場へは少くとも三十分前に行き、靜に自分の乗る列車の出發場所其他を調べるが便利である、ブラットフォームは幾つもあるから、發車間際に行けば乗車場所などわからないで、狼狽する事がある、乗車前に自分の時計を驛の時計に合はせて置き、時間表を求めて乗車するが必要である、乗車中どこを通過して居るか、乗換

驛はごんが等心配になるから、此時間表を見て自分の時計に合はせて行けば他人に問はずとも今何處を通て居るか乗換驛であるか否かは明にわかる、國境を越へる時には地方に依て標準時を異にする處がある、例へば佛蘭西と獨逸とは一時間異て居る彼様であるから國境を越えた時は必ず時計を其地の時計と合はせる要事を忘れてはならぬ、下車荷物に公認の赤帽に托するがよい、公認赤帽は番號をつけて居るから其番號を覚え置く要がある、手荷物數個ある場合には大陸では受取をくれるが、英國は自分で手荷物車に積み込む様になつて居る、他國では紛失の憂があるが英國に限り此の憂がないのは英人の誇さる處になつて居る、伊太利、獨逸、埃太利邊旅行の時は荷物は紛失の憂があるから注意を要する、汽車は長途の場合には一等か二等に乗る方が便利である、但し一等で乗客の少ない時は反て危険が多いから、注意を要する、普通は二等でよい、ホテルは突然入り込むと断られる事が多いから豫め電報で通知して置けば便利である、且ホテルは出来るだけ上等のものを選ぶ方が反て便利な場合が多い、ホテルに行けば最初事務所に至り依頼し、室番號札及室の鍵を受取り、其室に案内を受ける、宿泊料は食事を含まず、食事は食堂について勝手にさるゝことになつて居る、朝早く出立する場合には前日から豫めチースポーターに依頼し時間におくれない様に起してもらふ事が必要である、旅行にはチップは甚だ面倒なものであるが、普通やる事になつて居る、原則は最後の勘定の一例を與へるが習慣である、旅館に依てはチップを勘定書に記してくる事もあるから一應注意も必要

地中海紀行

である、然しなごへ勘定に加へて來ても又少々でもやるのが普通の様である、普通食事のチップは朝、晝は各三ペンス、夜は六ペンス、婦人同伴の時は二倍やるのが普通である、目的地に着した時は滞在が永くなる時は警察に届出を要する、倫敦では二ヶ月以上滞在者は届出を要し、ベルリンでは着後一晝夜以内に届出を要するに聞て居る。

三日、晴

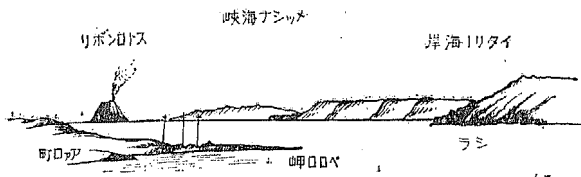
地中海に入て以來氣温が急に低下したので船

床は毛布にかへ寢衣もネル着物にかへる、船員も全部黒服になつた、自分は此の氣候變化の爲めか將、埃及旅行の爲めか少し腸胃をいためた、陸岸こそ見えないけれど内海の事まで波靜で恰も瀬戸内を行く感がある、早朝クリート島附近を通ると云ふので四時に起きて見る、右舷國かに島影を認めた、餘り高くない稍大きな島の感がした、八時起床快晴である、最後の諸會をやらんと例により小口、木永氏を始め關水、松本氏をも勝ひ御別の意味で鉢木、蟬丸を諸ふ、船長も來て融を語てくれた、午後の御茶には櫻餅が出たので特に出席する、印度洋航行中開催した運動會は未だ終て居ないが、内海に入てからは俄に上陸氣分が増したので運動熱が減じ御役目的にやる様な氣がした、今日は午後四時からポートテッキで子供運動會が開かれた。

四日、晴

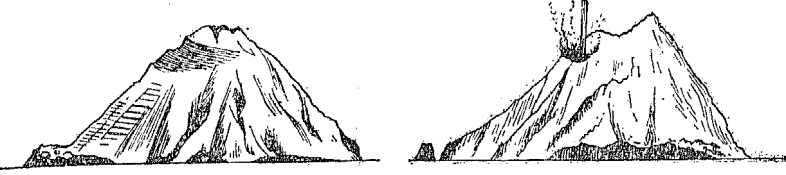
船は既に思ひ出深い希臘沖を過ぎて朝には早

くも伊太利の南端に近き右舷に陸影を認める様になつた、學士會一同撮影をするに云ふので上甲板で彼是して居る内に早くも海峡にかゝつて、シ、リー島を左舷に見る様になつて來た、伊



(む眺りよ南東) リボントス

(む眺りよ南西) リボントス



大利南端を通る時
には當地の最古の
岩窟町が見えるこ
聞たが遺憾ながら
見そこなつた、然
し餘程折がよくな
いと観えないと云
ふエトナ山は明に
眺められ雄大な噴
煙迄も觀る事が出
來た、其の富士の
様な美しい姿は誠
に寫眞で見た其ま
ゝであつた、メッ
シナ (Messina Str.)
海峡にかゝるこ俄
に波が高くなり兩
岸は段々近くな
り、左舷シ、リ
側にはメツシナ港
右舷伊太利側には
カボコ町が手に取
る様に見える、赤
色屋根の家屋が狭

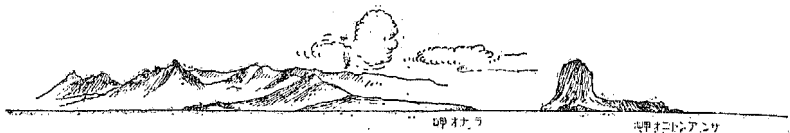
い海岸に立ち並て夜分通過する時は兩岸の電光燦然美觀を呈す
と船員は談て居た、最狭い處は伊太利側には岩石質の岬をなし
古城址の様な形跡を止め、左方シ、リ側には砂質の Bebe 岬
突出し Bebe と稱する小町が其上に在る、兩岸の間僅々二哩と稱
します、海峡を出て Gulf of Guaya に入り急に航路を西北にさ
ると前方遙に二三の小島を眺める Ichni or Aedina Islands だ
其の中の大きいのは有名なストロンホリ (Stromboli) 島である、
行く／＼兩岸を眺めるに伊太利側、シ、リ側共に山々に樹木
なく丘陵上迄耕作されて居り望遠鏡で觀ると確に果樹園、殊に
夫がオリブか、又け葡萄と觀察された、オリブ並に葡萄が
此の地方の名産である事を聞て居る自分にはなる程と考へられ
た、ストロンホリ島の南側を通過する海中に噴出した圓錐形の
島で盛に噴煙を吐いて居る、船長の談に依ると夜通過する場合
は流出するラバーが眞赤に見え壯觀を呈するやうである、余の
通過は午後の二時過であつたか恰も櫻島噴火の際自撃した様に
眞赤な火柱を時々みさめる事が出來た、船では最後の競技會が
開催され、甲板は得利なげ、兄弟は居るか、を始め最後に繩引
等甚だ賑であつたが、ストロンホリの壯觀の爲め自分は競技を
見る暇がなかつた、沿岸を通る際熱視すると急峻な島であるに
も係ばらず、南麓海岸には少許の民家があり、中腹迄耕作せら
れて居る、乗客達はこんな處にも民家があるよと云ふので其の理
由に苦んで居たが、こんな島にも小麦、大麥、棉花を産出し殊
にラインは地中海地方中最良質であるよと知て居る自分には趣味
を以てながめた、(人口約四千)、夕食後食堂で運動會の賞品授



(む眺りよ南東) アニゲルサ



(む眺りよ南東) カシルコ



岸海ニイマス

興式が行はれ、終て一等運轉士鎌田峻舟氏の郡山流本曲若菜があり非常の賑を呈した。

五日、晴

天氣もよく頗る平穩である、十時頃左舷にサルゲニア島の北端が見えて來た、阿弗利加海岸で觀た様な岩石質鑛式の山が連亘して居る、午後になりコルシカ島との間に在る海峡即ちボニファシオ(Bonifacio Str.)を通過する、コルシカ島はサルゲニア島よりも雄大な景色を呈し、高峯には白雪をみこめた、毎度此の邊を通られる織田博士は、此の頃白雪を見る事は珍しい現象で、定めし氣候の變化で近頃降雪したものであらうと云ふて居られた、一同珍しげにながめる、海峡にかゝるミメツシナ海峡と同様氣壓の關係で又白波が盛に立つて來る、北側はC. Peraga 南側はC. Togaで幾多の小島が海岸に散在して居る、何れも白色の岩石で水平の地層が美しくあらはれて居る、航海には危険が多い様に眺めた、コルシカ島海岸には一艘の汽船が座礁して居た、此處からは一直線にマルセイユに向ふので餘す處二百哩餘明朝は着港永い航海も一段落を告げる事になる。

六日、晴

昨夜少々動搖を感ず、マルセイユの入口で少しやられたさは渡歐者のよく云ふ處であるから此の位の動搖は好成績と云はればならぬ、起床すると既にマルセイユ近くの陸岸に滑て走て居た、あの邊が港ださ教へられて注視する海中の孤立岩上に立つ燈臺附近を通るミ船は方向を變へて馬港口に向て進むらしい、右手の海岸は峨々たる白色岩山で朝の新鮮な空

と濃藍色の海波と相映じて本邦などには觀られぬ珍しい景色を呈して居る、岩丘の頂上に屹立せる建物は有名なノートルダム寺で高塔の先端にはマリヤの銅像がある、其の左側塔に高い吊橋が見えて来る、マルセイユの舊港で有名な橋である、市街の屋根が漸次明かに見える様になり左舷に一小島を發見する、相變らず白色の岩島で、岩上には同色岩石質の城砦風の建物が立て居る、之れが夫のデューマの小説モンテクリスト(巖窟王)で有名な牢獄シャトノティフ(Chateau d'If)である(案内記による)見物した京大助教植村清之助氏の談に依るに岩牢内の各室には其處に幽閉された名家の姓名を記して保存されて居るに、マルセイユ港は舊港(Vieux Port)と新港との二部から成て居る、舊港は前に觀た大吊橋の在る處で、海岸に長方形の灣入を造た處で、之は早く希臘植民時代から在るのだと云ひ規模が小さいから現今の港としては利用出来ない、現今の港即ち新港は其の西側に在つて海岸に沿ひ長く防波堤を築き海岸からは岸壁を多數に築いて船舶の碇泊に備へて居る、運河式の港であるから港内狭猛大船の出入には甚だ不便である、自分の船もシャトノティフ島をまはつて運河の西北の口から靜に入港し岸壁に碇船した(八時頃)乗客の大部分は此處で下船するので大混雜である、旅券に上陸許可證をおしてもらつて夫々上陸する、同食卓の徳岡、本永兩氏は同室の藤音得忍、上村辰己氏と同道此處から直に巴里に向ふので多忙であるが、自分は此儘ロンドン迄行くのであるから暇である、船は明日正午出帆であるから一層餘裕がある、丁度小口博士が徳岡氏等とは別に今夜十時の汽車

で獨國に入る事になりだといふ暇があるので同道市内を見物する大抵は當港に居る日本人の案内者に頼んで見物するのだけれども、小口博士が幸再度の旅行であるので御案内を得てぼつ／＼見物する、船を下るに直ぐ岸壁上の上屋で税關の調べがある、船から搬出した乗客の荷物がうづ高く積まれ一大混雜である、港は何處も同じだが、貨物を運ぶ馬車や品の悪い労働者等が徘徊して居るので氣持が悪い、門を出るに海岸道である各種の汽船會社や倉庫等がひしと並んで居り、賑か様なきみしい様な景色で之れも氣持がよくない、町は餘り廣くないから直ぐ近くに繁華の中心地がある、大通を通つて船から觀た舊港を觀、大吊橋を眺めて入港第一に遠望したノートルダム寺に參詣する、樹木のない白色岩石質の丘陵上に孤立して居るので市街港灣一望の下に在り殊に快晴であつたので眺望絶佳であつた、市街を眼下に觀る點は數句前ヒークに登で香港市を眺めたのと異りはないが、前者は綠樹深く濃霧時々に襲來爰れる空自ら冷氣濕潤を感じたが、此の地は一本の樹木だになく白色岩石質の土地に日光強く反射し一點曇りなき背空海は益々青く周邊の山岳は赤褐色を帯びて如何にも乾燥の氣分を起さしめる、濕潤な東洋と乾燥な地中海地方との差を適切に感ぜしめた、香港は海峽を利用した良港であるに反し當港は良灣入ではあるか灣内には一二の小島が横て居るのみで港口開放に過て居るので防波堤を海岸に沿つて運河式に建設し、陸岸から岸壁を幾つも突き出して碇泊に備へたので香港に比するに甚しく狹隘で大船の出入には甚不便である、自分の船も出港の際には甲門に船首を突きあつるの不幸

に遭遇した、市街は三方山岳で圍まれて居るので地積狭小で一日か、れば大要を何ふ事が出来る、暫し景色を眺めて丘を下り丘麓の公園に憩ひ再大通に出で晝食をする、香港の町が高樓立ち並んで街路の狭かつたのに反し此處は道幅は廣く街の兩側には綠樹蔭深く茂つて如何にも見事であり、レストーラントは木蔭に椅子を並べて休憩に備へ市民は空席もなき程之に憩ふてワインの香に酔ふて居るのか人形の如く悠然と街路を眺めて居る、埃及のカイロー府にも此の氣分を見たか此處になつては殊に甚しきを覺えた、氣の短い邦人には一寸眞似の出来ない有様である、此處が佛蘭西の特徴かも知れない、郷に入れば郷にならへで自分等もワインを註文する、如何なる下戸でも此處へ來ては益なしには居られない様に出來て居る處は面白い、佛國がワインの名産地である事は三歳の兒童も知て居る事であるうし、學校でも講義にはワインの名など随分細かく話したしたが此處に來て一層其の感を深ふした、酒に伴ふ利害得失等論する暇もなく電車に乗て程へた美術館植物園を縦覽し、小口博士は今夜の汽車で出立せられ自分は船に歸つた、昨日迄の賑に比すると今日は火の消えた様なもので其のさみしい事云はん方なしである自分の室も上村、藤音爾氏が上陸したので何だか空屋にでも入た様な感にうたれた。

七日、晴 船は正後出帆であるから少しでも見物せんま市内を散歩、重に海岸通を觀察する、マセヂエリー・マリチエム會社の大規模なのが眼につく流石は佛國の大汽船會社と愉快

地中海紀行



(州テンカリア) 岸海ニイヘス

に眺めた、豫定の如く正後を以て出帆する殘た者は邦人側では僅に三井氏夫妻と朝鮮總督府の一兩氏に過ぎない甚ださみしい、幸海上靜穩で恰も瀬戸内海を行くが如く佛蘭西の海岸も程なく眼界を辭し、夕頃には西班牙の境にかゝり美しい日没の光を浴びて遂に山影を眺める事が出來た。

八日、晴 今日も天氣海波靜かである、既にバルセロナ沖を通じて居る、九時頃には左舷に Balearic Is. 中の島影を眺め汽船二艘に出會つ晝頃には右舷雲霧中に西班牙の岬が見えて來た、Cala Nao である、雄大な景色で大きな岩山が孤立して居るのが眼につく、西南から吹く風が稍強くなり、白波が立て來た、然し船の來往は段々多くなり又一艘海岸近くを走て居るのを觀た、午後には右舷に西班牙の連山を眺め得る様になり Valencia 港の西南に突出して居る C. Antonio 並に C. Nao が高臺性の上に雄大な Mt. Mingo (2996 ft) Sierra de Benio (3636 ft) が屹立して觀える、Alicante 酒の輸出港 Alicante 港も此の邊ならんと思ひつゝ、六時頃には右舷前方に C. Palo を眺め Escalier Mus が其の上に聳えて居る、海圖に依ると此の邊は Mar Mero である

Lagoon のある處にまはるる Cartagena 港である等と趣味を以て眺めつゝ進む、夕頭には風も和き、海上再油をながした如く静かになつた、何時しが出た三日月は銀波を照らして陸岸の燈臺近く光り、行き過ぐる汽船のひかりも何となく静の如く、湯上りの涼氣に眺める、爽快であつた。

〔九日、晴〕

今日も快晴猶、西班牙の海岸を走つて居る、連山は昨日よりも近く観えて、西班牙の特徴かと思はるゝいでたちである、高峯には雪を戴いて居る、船長の話に依るま之が Sierra Nevada である、海圖で調べるま何れも一萬呎以上の Cerro

地理教材としての地形圖 (九)

平壤南方の準平原——樂浪準平原

參照圖 五萬分一 中和(平壤三號) 岐陽(平壤七號)

二十萬分一 平壤(朝鮮總督府編、小林發賣)

ペネプレー

準平原と云ふデーヴキスの作つた言葉がさうでもなささうな地形を現はすのに濫りに我が國の地學界で用ひられて居る様な氣がする。山崎博士が天龍下流地方の臺地の基底の過去の準平

Mulatacon, Pico Velez, Cerro Caballo 等である、晴天にかすみて見ゆる景色は美しい、汽船の往來も段々多くなり、氣温も段々暑くなつて來る、朝には七十五度を示して居た、晝前になり愈ッブラルター海峽に差しかつて來た、歴史的にも地學上にも面白い處なので希望を屬して居た處だけ趣味深く眺める。

原を説かれた(地質學雜誌第十二卷四)以來、大抵今では彫刻されてゐるが或る地質時代には準平原であつたといふ過去の準平原を説いた記述のみである。地質學に堪能でない人達に執つては今